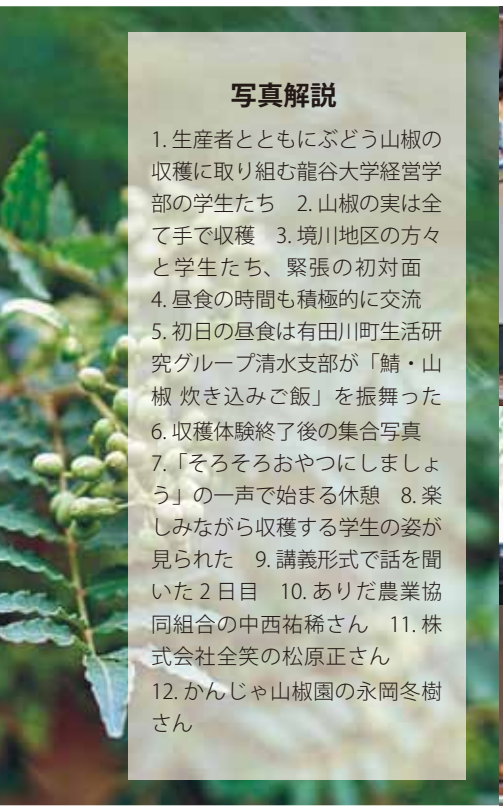

写真解説

1. 生産者とともにぶどう山椒の収穫に取り組む龍谷大学経営学部の学生たち　2. 山椒の実は全て手で収穫　3. 境川地区の方々と学生たち、緊張の初対面　4. 昼食の時間も積極的に交流　5. 初日の昼食は有田川町生活研究グループ清水支部が「鯖・山椒 炊き込みご飯」を振舞った　6. 収穫体験終了後の集合写真　7.「そろそろおやつにしましょう」の一声で始まる休憩　8. 楽しみながら収穫する学生の姿が見られた　9. 講義形式で話を聞いた２日目　10. ありだ農業協同組合の中西祐稀さん　11. 株式会社全笑の松原正さん　12. かんじゃ山椒園の永岡冬樹さん

有田川町×龍谷大学

「ぶどう山椒（さんしょう）の発祥地を未来へつなぐ プロジェクト」

全国屈指のぶどう山椒生産量を誇る有田川町。しかし、高齢化による離農や後継者不足が深刻で、5年先の産地の維持が難しいと言われています。そんな中、ぶどう山椒の産地振興を図ろうと、龍谷大学（京都市）とともに「ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト」が始まりました。同プロジェクトでは、学生の柔軟な発想から商品開発・企業提案を行い、協力企業の商品をとおして、ぶどう山椒と産地の魅力を外部に発信し、当町への関心を引き込むことを狙いとしています。同プロジェクトに賛同いただいた境川地区、事業者の方々に協力いただき、フィールドワークを行いました。

5月29日（水）境川地区に到着した学生らは生産者の方々と交流しながら昼食を取った後、それぞれの園地に分かれて山椒の収穫を体験しました。「実を収穫するのは結構大変。だけど楽しい」と、楽しみながらも真剣に収穫を行う学生たち。産地の課題、山椒づくりにかける思い、後継者に関することなど、積極的に生産者の生の声を聞き取る姿が印象的でした。この日の活動終了後、学生らは生産者から聞き取った内容を共有し、産地の状況が予想以上に深刻であることを改めて認識しました。2日目にはぶどう山椒を取り扱う「ありだ農業協同組合」「株式会社全笑」「かんじゃ山椒園」から、山椒の特徴、流通状況、市場ニーズなどの聞き取りを行うことで、今後の取り組みにおけるヒントが得られたようです。

この2日間の合宿を終えた学生からは「収穫のための人員が圧倒的に不足していることや、普段生産者が感じている肉体的な負担を体感できた」「生産者の方がすごく優しくて、多忙な時期に私たちを温かく迎え入れてくれたことがありがたかった。このプロジェクトを絶対に成功させたいと、一層強い意志を持った」などの声が挙がりました。また、学生を受け入れた生産者の方々は「今までは自身のために生産していたが、学生たちとの関わりで生産意欲が湧いた。来年も生産を続けてみようと思った」「地域がこんなに活気にあふれた日は、今までになかった。学生のぶどう山椒に向き合う姿勢にも感心した」と言います。学生だけでなく、生産者の方々にとっても実りある日になったようです。

今後、学生たちは山椒商品の試作、市場調査や企業提案などを行います。町としては産地と大学との関わりを発展させ、また、協力企業と産地との連携を図り、産地や農山村が抱える問題の解決に向けて取り組んでいきます。